やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	38 / 2017 / 24−25　(再編集版)
タイトル	郡場寛先生と青森県スキーのこと
著　者　名	室 谷　洋 司

自然を見つめる やぶなべ会（青森）

郡場 寛先生と青森県スキーのこと

第10代　室 谷 洋 司

国立国会図書館に、「青森県スキー年報.No.1」(青森スキー連盟、昭和7年発行)という図書が所蔵されている。そのなかに、わが郷土が誇る生物学者・郡場寛先生の寄稿文を見つけた。その全文を紹介する。

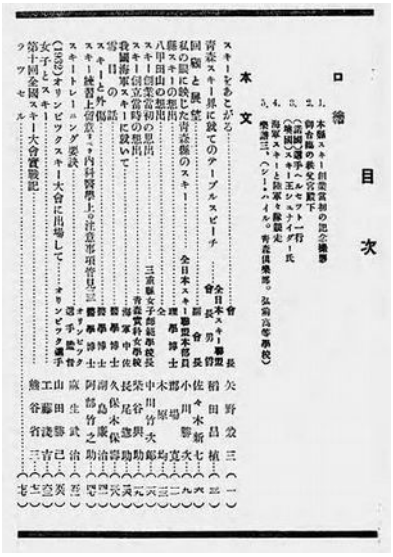
本文にもあるが、これには先生が八甲田山に初シュプールを描いたときの様子も記されており、それは1918(大正7)年2月下旬のことであった。

郡場 寛先生の「県スキーの想出」(昭和7年)

私等の子供の時には冬の運動具はベンザイ丈であつたが、青森には坂が少ないので滑降の出来るのは堤橋位のものであつた。然し道路がツルツルに凍つた時、羽織を裏返して強い西風に吹かれ合浦公園辺まで乗つて行くのは愉快であつた。其頃は服装も簡単で雪の中に転ぶと仕末が悪いので、冬は子供の天地を著しく狭くして居つた。

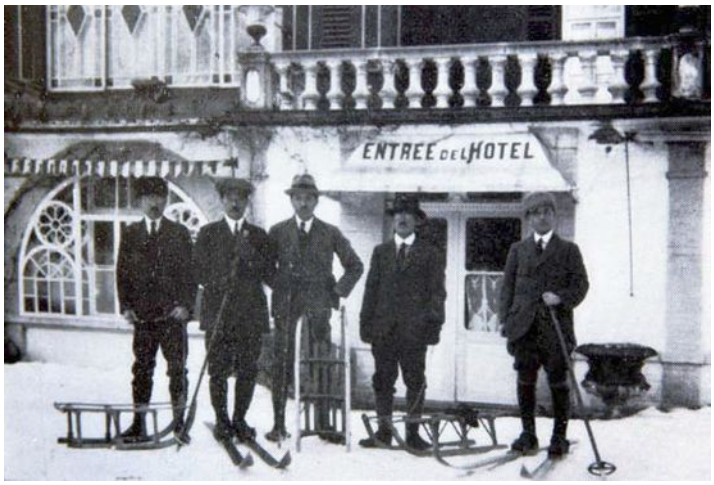
スキーが我邦に渡来し札幌や高田で始められ、新聞にも記事や写真が出る様になつた頃、私は郷里へ帰つて次の様な話を聞いたことがある。「先頃スキーといふものを持つて来てカンジキと競争した人があつたが、あんな橇のような長い物を履いてるのでトテもカンジキには及ばなかった」。之は多分硬雪の折郊外で平地滑走でもやつたものかと今想像してゐる。

其後数年、私は札幌で五冬を過した。本物のスキーを見たのは其時が始である。学生等が放課後校庭でスキーを練習してゐるのを見ると、平坦な為でもあるが如何にも運動が緩慢で、方向を換へるには足を高く挙げなければならず、いかさま雪の上をあるくのだから、斯うでもしなければ動きがとれまいと、始めて見る目には頗る異様でもあり滑稽にも思はれた。それで私は二冬の間はスキーに関心を有たなかつた。所が三冬目の或日、是非やつて見よと勧められ、スキーを履かしてもらつて校庭の


目次

「青森県スキー年報」(No. 1、1932、青森県スキー連盟発行)の表紙(左)と目次。寄稿者は35人、先生は5人目掲載、全164頁余。

郡場　寛先生(1882−1957)
1957(昭和32)年の75回目の誕生日に撮影。



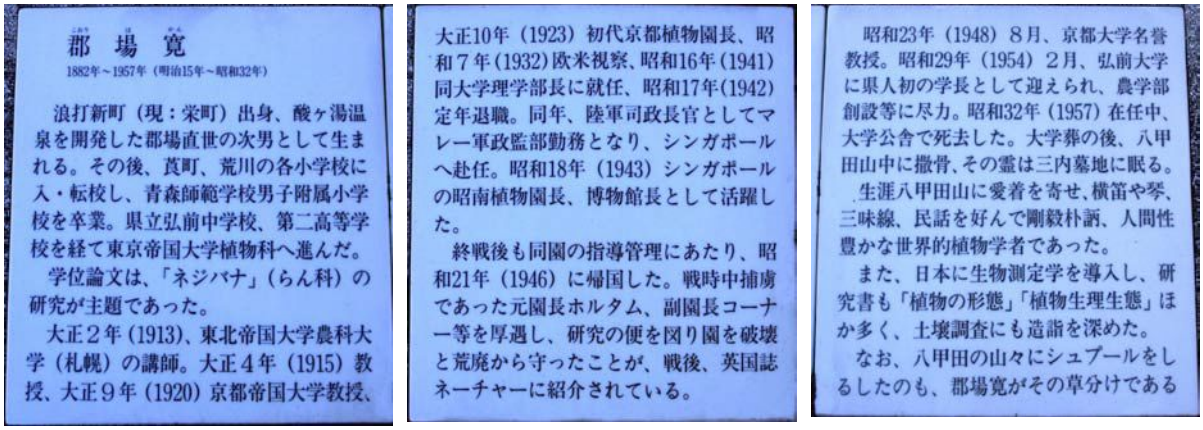
1919（大正8）年12月、スイス・グリンデンワルドのホテル・アドラー前で。左から二人目が郡場先生。（青森スキー年報の記事とは関係ありません）

小さなスロープを滑つたが、其が縁になつて四冬目には本気になり、圓山や三角山へも行き、雪山はスキーで行かれるものとの自信が着いた。

私は小さい頃から毎年酸湯温泉へ行き、硬雪の季節には草鞋ばきで大岳へ登つたり南部へ越えたりした事があるので、一度は是非スキーでも行つて見たいと希望してゐたのであるが、大正七年春、余暇を得て之を決行した。当時青森ではスキーは師範に数台、其他にも少しはあつた様だが、只新城付近で簡単に滑降する程度に過ぎなかつた。富士山や北海道の山々は次第にスキーで走破せられて居たのであるが、青森では「スキーで山が登られるか」とか「滑り出したら谷底迄止まるまい」などゝ問はれた位で、あの雪の深い山へ行くなどとは想像も出来ない位であつた。此登山には札幌から当時の学生木原、岡見両君が来援せられ、鹿内辰五郎がカンジキで案内に立つたので、登山組としては充分であつたが、酸湯着後天候に恵まれず、大岳登は途中で引返し、一日は殆ど閉ぢ込められ、下山の日も吹雪の為に先が見えなくなり、鹿内が雪庇から没落するなどの出来事もあつたが、最後に前岳の東斜面を滑つて銅像へ降りたのは愉快であつた。此行スキーとカンジキとの優劣もよく実見することが出来た。

其後私は殆ど県スキーに接触する機会はなかつた。然し日本各地に於けるスキーの発達に伴ひ、県スキーも量質共次第に発達し、スキーの製作所も出来、連盟が成立し、大鰐のスロープが競技場となり、跳台が出来、秩父宮殿下の御来臨を仰いでからは目立つて盛になつた様に思はれる。また八甲田や岩木山は年中行事として登られる様になつた。

県人は努力の点では決して他に負けないが技術の方面では兎角く遅れ勝ちである。然るに今や県スキー連盟の指導機関誌が発行せられる運に至つた事は誠に喜ばしい事である。願はくは県スキーの中心となり健実なる発達を遂げ、雪国人の元気勃興に貢献せられるやう切に希望する次第である。（寄稿文、おわり）



青森市栄町1丁目の、先生の昔の居宅前に建立されていた記念碑。先生の業績が刻み込まれている。
2001年11月、筆者撮影。（近年、この記念碑は同所に見当たりません。）